

大館市文化財調査報告書 第18集

真館Ⅲ遺跡発掘調査報告書

2020

秋田県大館市教育委員会

大館市文化財調査報告書 第18集

真館Ⅲ遺跡発掘調査報告書

2020

秋田県大館市教育委員会

例 言

1. 本書は、秋田県大館市比内町新館字真館37番、46番に所在する真館Ⅲ遺跡（秋田県教育委員会 登載番号204-12-53）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、福祉施設敷地造成工事に伴い、事業者の負担を受け、大館市教育委員会が実施した。調査の体制・期間は第Ⅰ章に記した。
3. 本調査で出土した遺物ならびに作成した記録類は、大館市教育委員会が保管する。
4. 発掘調査から報告書の作成に至るまで、調査委託者である社会福祉法人 比内ふくし会 理事 佐藤 剛氏をはじめ、下記の方々からご教示・ご協力を得た。（敬省略、五十音順）
秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、大館市消防本部予防課、
有限会社 小笠原測量設計事務所、五十嵐 一治、伊豆 俊祐、高橋 和成

凡 例

1. 本書遺構図等における各基準は、下記のとおりである。なお、図の方位は発掘区のX軸正方向が図面天方向に合致する。その都度スケール、方位、凡例等を示す。

遺構配置図		1 : 200
柱穴列	S A	1 : 40
土坑	S K	1 : 20
落とし穴	S K	1 : 40
柱穴様ピット	S P	1 : 40
焼土	S L	1 : 40
2. 遺物の写真図版の縮尺は、土器が約1 : 3、剥片石器が約1 : 2。
3. 一覧表における遺構の規模のうち、確認面・底面の項については長径×短径で表した。

目 次

例言・凡例

目次

第 I 章 調査の概要

1 調査の経緯	1
2 調査要項	2
3 調査の経過	2
4 遺跡の位置と周辺環境	3
5 発掘調査の方法と層序	4

第 II 章 遺構

1 概要	5
2 柱穴列	5
3 土坑	6
4 落とし穴	6
5 その他の遺構	13

第 III 章 遺物

1 土器	14
2 石器	14

写真図版

報告書抄録

第 I 章 調査の概要

1 調査の経緯

平成28年8月、大館市比内町新館字真館37番・46番の土地購入予定者（以下、事業者）より、同所に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地真館Ⅲ遺跡（登録番号204-12-53）の内容とともに将来的に開発行為を行うに当たっての手続きなどについて照会があった。このため市教育委員会（市教委）は土地所有者の了解を得て、当該地の詳細分布調査を行い、遺跡の内容を確認することとした。この結果、当該地番内には縄文時代後期の集落を構成するとみられる土坑などの遺構および遺物の分布が明らかになったことから、事業者に対し遺跡の内容とともに、文化財保護法の規定に基づく土木工事等の際の手続きについて通知した。調査結果については、『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(5)』（2019.3）に報告したとおりである。その後、平成30年7月31日、事業者である社会福祉法人比内ふくし会 理事 佐藤剛氏より当該地における福祉施設敷地造成に伴う土木工事等のための発掘の届出書の提出を受けた。市教委は同届出書に埋蔵文化財の保護、保存にかかる意見を添付し、秋田県教育委員会あて進達した。この結果、遺跡の現状保存は困難であると判断され、8月7日付で事業者に対し当該工事にあたっては事前に記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨の回答があった。これを受け、事業者と市教委は、工事計画・内容と発掘調査の調整を行った結果、福祉施設1棟を建築する敷地のうち130㎡について、平成30年度に事業者の費用負担を受けて発掘調査を実施することで合意した。調査地の地番は、大館市比内町新館字真館37番・46番。野外調査は平成30年8月28日～9月27日まで行い、報告書の刊行については他の実施事業もあり、令和元年度に行うこととし、平成30年11月1日から令和2年2月29日までの間で整理作業を実施し、調査報告書を作成した。

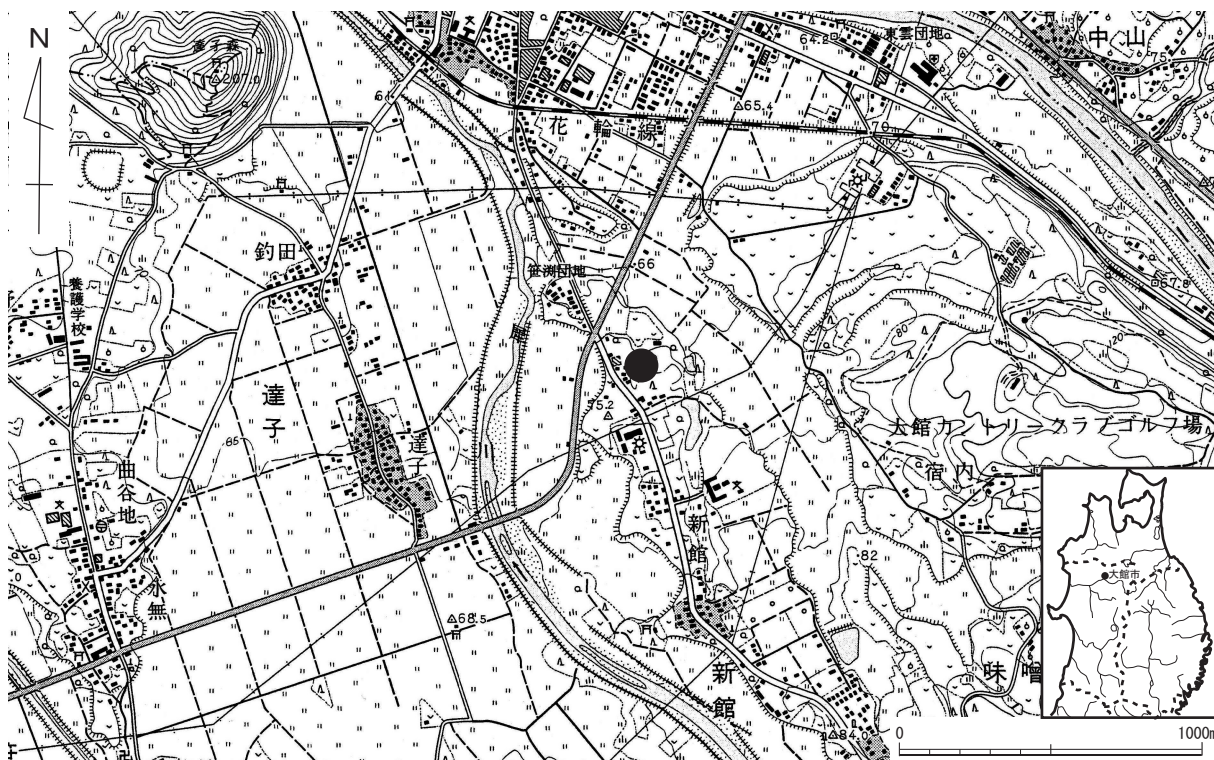


図1 遺跡の位置（縮尺1：25000）

国土地理院1988年発行（1987年修正測量）
扇田1：25,000を一部加工

2 調査要項

(1) 調査期間

現地調査 平成30年8月28日～平成30年9月27日

整理作業 平成30年11月1日～令和2年2月29日

(2) 調査面積

130㎡

(3) 調査体制

教 育 長	高橋 善之
教 育 次 長	本多 恒博
歴史文化課長	若宮 司 (平成31年3月31日まで)
歴史文化課長	長崎 美幸 (平成31年4月1日から)
課長補佐兼	
埋蔵文化財係長	大井 和博
主 査	滝内 亨
同	嶋影 壮憲 (担当者)
主任主事	馬庭 和也

3 調査の経過

(1) 発掘等経過

平成30年

8月28日 発掘調査開始、表土掘削開始

8月29日 表土掘削終了

9月1日 臨時職員6名任用し、器材を大館郷土博物館および大館市役所から運搬、作業開始

5日 遺構検出作業開始

6日 検出状況写真撮影、遺構掘削調査開始

19日 全体清掃

20日 大館市消防本部の協力を得て、ドローンにて全体写真撮影

26日 地形測量、器材水洗

27日 器材を大館郷土博物館および大館市役所へ運搬、地形測量、発掘調査終了。

(2) 整理経過

平成30年度：11月1日から整理作業開始、遺物洗浄・注記、遺物写真撮影。

令和元年度：1月4日から遺構図整理、報告書執筆開始。

4 遺跡の位置と周辺の環境

真館Ⅲ遺跡は大館盆地の南東部にある大館市役所比内総合支所から南東約0.5kmに分布している。遺跡の拡がりには東西方向にのびる細長い範囲で、面積は5,500㎡ほどと推定される。位置は北緯40度12分56秒、東経140度35分10秒付近、地番は大館市比内町新館字真館37番・46番である。

大館盆地は東西10km、南北15kmのほぼ三角形をした盆地で、盆地内には高市軽石質火山灰層や鳥越軽石質火山灰層を基盤とする台地や段丘が分布している。台地や段丘には基盤層を深く開析した多くの沢が発達し、これらの沢に面した台地や段丘上には多くの縄文時代以降の遺跡が残されている。

真館Ⅲ遺跡もこうした沢に面して分布する遺跡のひとつで、盆地南東部から南東-北西方向へと入った沢とその枝沢が合する舌状台地の南斜面に広がっている。真館Ⅲ遺跡の南に面する沢は、福祉施設建設の造成が進められ、すでに埋められている。

この沢の対岸には、平安時代の集落跡である真館Ⅱ遺跡が分布する。真館Ⅱ遺跡では福祉施設建設に伴う試掘確認調査によって、遺跡の内容が明らかにされている（『大館市内遺跡詳細分布調査報告書(3)』2013、『同(5)』2019）。

なお、本遺跡周辺の歴史的環境については、『本道端遺跡』（比内町教育委員会1986）、『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』（秋田県埋蔵文化財センター1988）に詳述されているため、そちらを参照されたい。

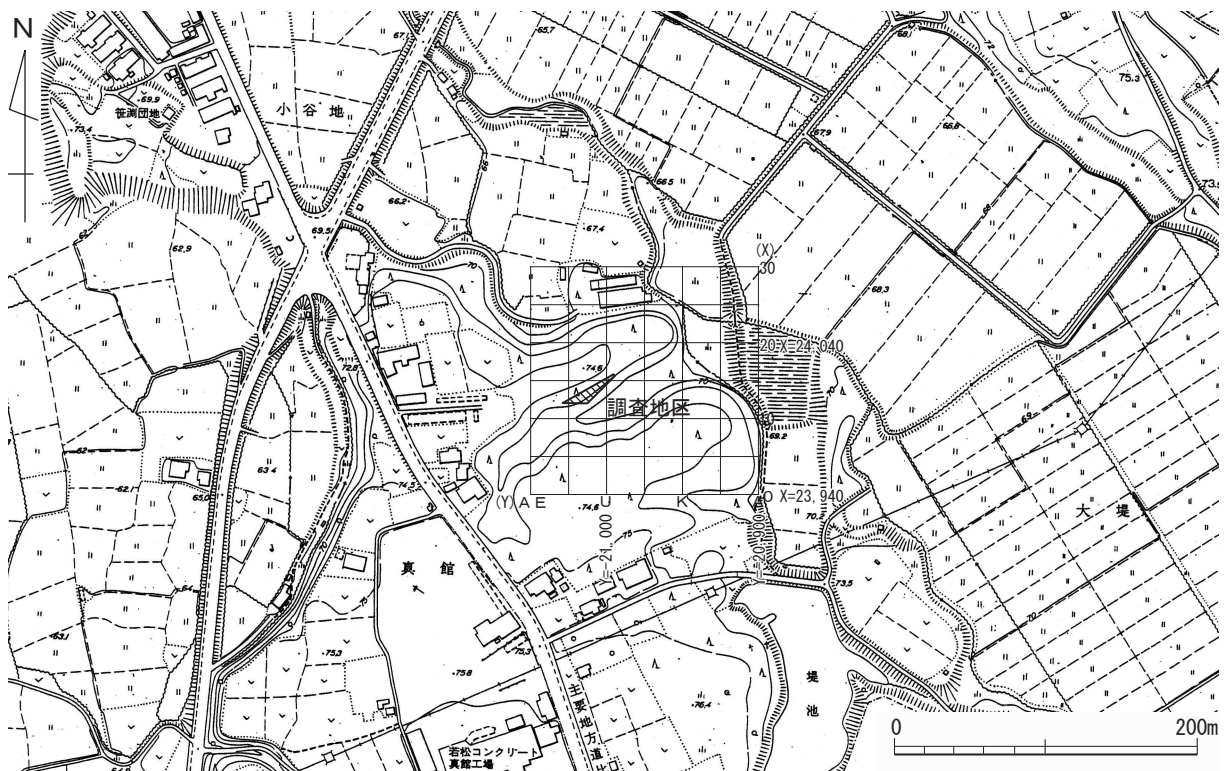


図2 調査地区と周辺の地形（1：5000）

比内町計画平面図
1987年測図1：2500→1：5000

5 発掘調査の方法と層序

(1) 調査方法

真館Ⅲ遺跡を包括するXY直交座標系の発掘区を設定し調査を実施した。座標系発掘区のX・Y軸は東西・南北の座標軸に設定した。座標の原点(A-0)は、遺跡の南東方向にある。発掘区の呼称は南東隅の杭の座標で表示され、本調査地区はX=12~15、Y=T~Zにあたる(図3)。なお、公共座標は図2に示すとおりである。

調査は過去の大館市の発掘調査方法(『中茂屋遺跡発掘調査報告書』2016)に準じて行ったが、今回は5m角のグリッド法で実施した。遺物は遺構毎、発掘区及び小発掘区単位でかつ層位毎に取り上げ記録した。遺構等の位置情報はトータルステーションシステムを使用し、発掘区的位置を元に作図、記録した。整理作業の方法及び遺物の分類についても当市の方法(前掲書)に準拠して行っている。

(2) 層序

詳細分布調査時の断面の観察から次のように土層を区分した。

I層 山林として利用されていた際の表土。平均層厚20cm。本層上部に本調査に先立ち実施した造成時の盛土が認められる。

II層 黒色腐植土。本来の遺物包含層。ほとんど残存していない。

III層 漸移層。暗褐色を呈する。平均層厚8cm程。

IV層 黄褐色(10YR5/6)ローム層。十和田降下軽石の風化層と考えられている。

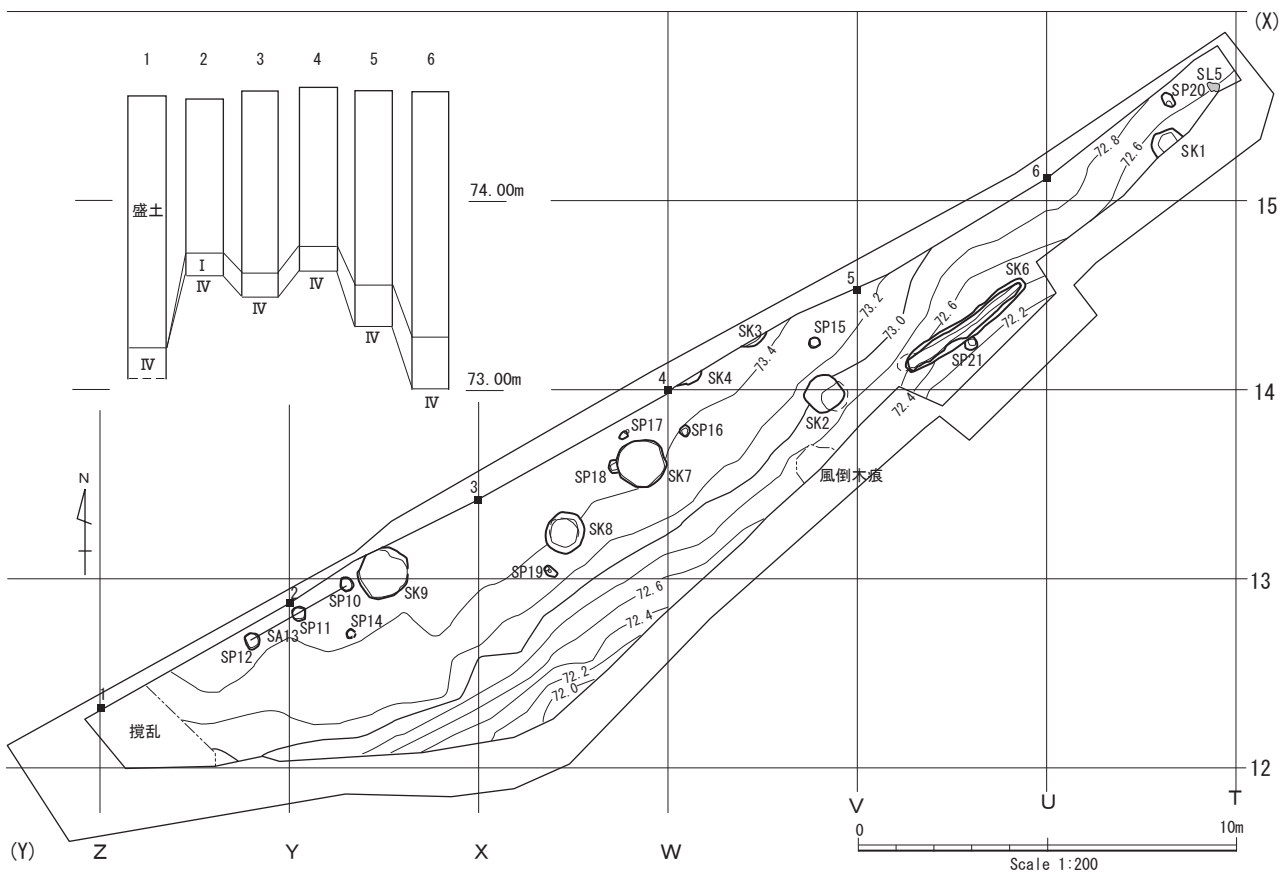


図3 遺構配置図

第Ⅱ章 遺構

1 概要

今回の調査範囲は、遺跡の南端部にあたる。調査面積は130㎡である。遺構は柱穴列1条、土坑7基、落とし穴1基、柱穴様ピット8基、焼土1ヵ所が検出された。

表1 種別遺構一覧

柱穴列	土坑	落とし穴	柱穴様ピット	焼土	計
1	7	1	8	1	18

表2 遺構出土遺物一覧

分類	S	計
点数	1	1

2 柱穴列

柱穴列13

位置 X-12区・Y-12区に位置する。

遺構 2間(3.2m)の北東-南西方向(N-60°-E)のもので、柱間寸法はいずれも1.5mを測る。柱穴掘り方は径34~43cmの楕円形、深さ16~35cmである。本柱穴列は柵跡と考えられるが、調査区外に拡がり掘立柱建物となる可能性もある。遺物は出土せず、時期も不明である。

表3 柱穴列一覧

番号	位置	平面形	規模			長軸 N→E	時期	備考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
SA13	X・Y-12	—	3.20 × —	—	—	60°		
SP10	X-12	円	0.43 × 0.39	0.35 × 0.30	0.20			
SP11	X-12	円	0.37 × 0.39	0.30 × 0.33	0.35			
SP12	Y-12	円	0.34 × 0.39	0.27 × 0.33	0.16			

SA13

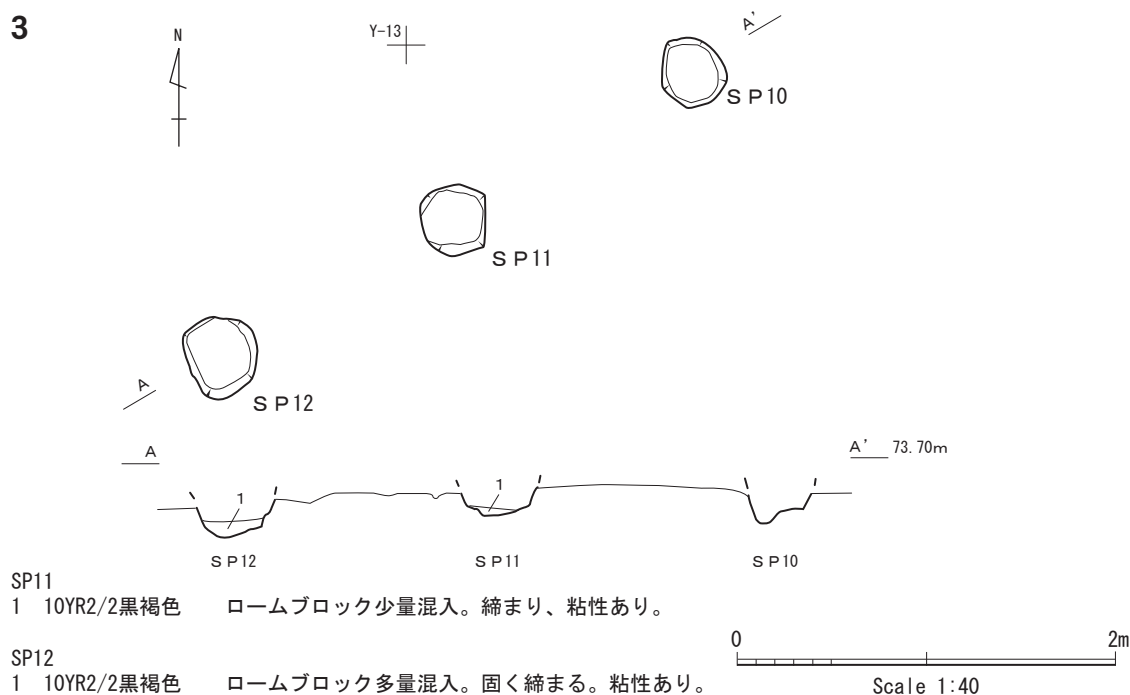


図4 柱穴列13

3 土 坑

調査区内から検出された土坑は7基であり、調査区全域に分布している。

遺構 土坑の平面形はいずれも円形である。土坑の規模は径70～140cm、確認面からの深さ14～134cmである。これらは大きく、確認面での規模が70～90cmクラスの土坑と100cm～130cmクラスの土坑の2群に大別される。前者は深く、後者は浅く掘り込まれるものが多い。埋土の土質や色調などを比較すると、黒色腐植土（II層）を主体とする土坑と黒色腐植土（II層）にローム（IV層）がブロック状に多く混入する土坑に大別でき、内訳は前者5基、後者2基（土坑7・9）となる。前者の土坑の堆積状態は、自然堆積か人為的なものかの区別はつきにくいものの、明らかに短時間で埋め戻されたとみなされるものはなく、いずれも埋没するのに一定時間を要したと考えられる様相である。

遺物 土坑内から出土した遺物は土坑1から出土した礫片1点のみである。

用途・時期等 出土遺物や埋土の堆積状態から用途を特定する手がかりは得られたものはない。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、埋土の堆積状態や周辺の出土遺物からみて、縄文後期以降に構築されたものと考えられる。

4 落とし穴

調査区内から検出された落とし穴は1基であり、調査区南東部に位置している。

落とし穴6

位置 調査区の南東部U-14区に位置する。

遺構 平面形は溝状の形態で、長軸方向は北から54° 東にずれる。規模は確認面で384×52cm、底面の規模は長径370cm、幅10cmほど。確認面からの深さは76cmである。遺物は出土していない。

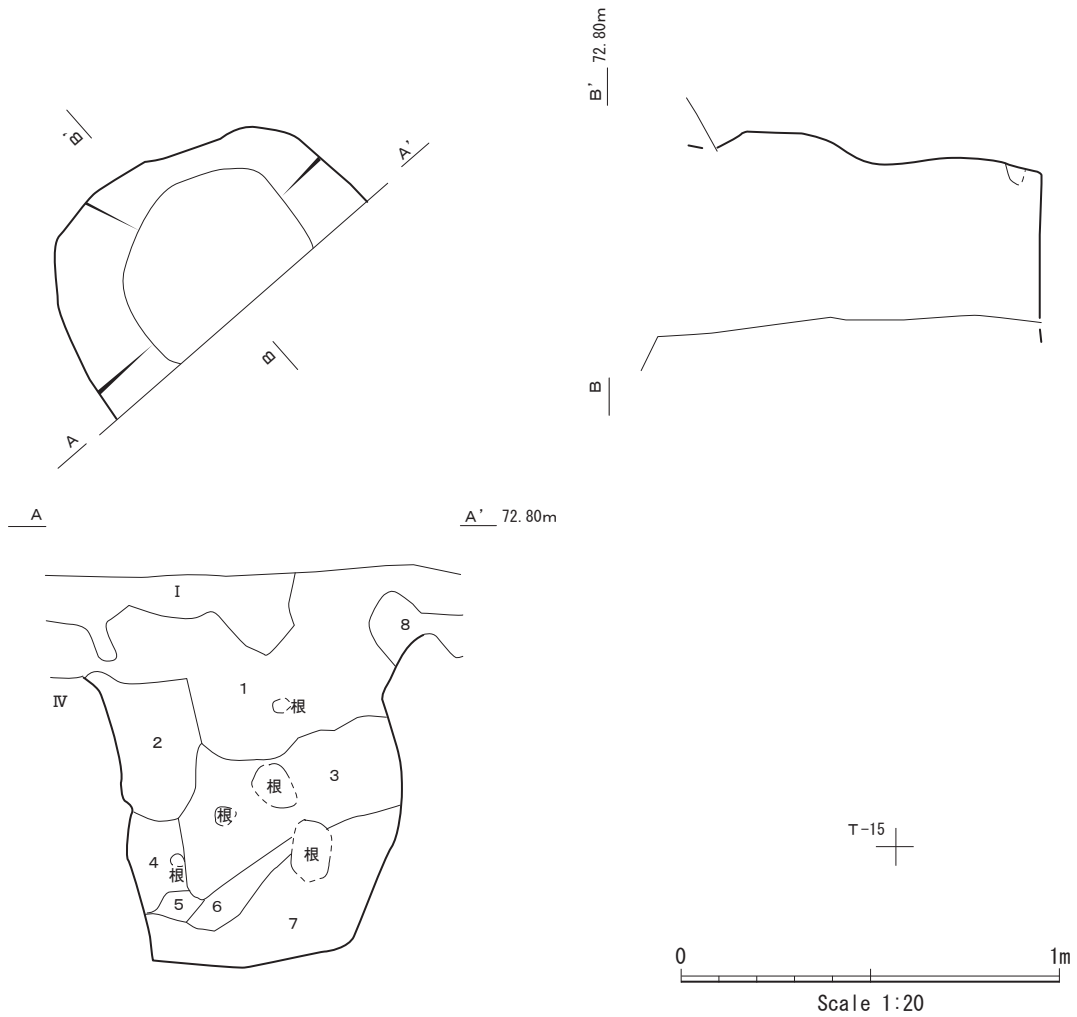
表4 土坑一覧

番号	位 置	平 面 形	規 模			長 軸 N→E	時 期	備 考
			確 認 面(m)	底 面(m)	深 さ(m)			
SK 1	T-15	円?	0.84 × —	0.50 × —	0.87	—	—	SP18→SK7
SK 2	V-13・14	円	0.92 × 0.92	0.73 × 0.62	1.21	—	—	
SK 3	V-14	—	(0.86) × —	(0.68) × —	(0.14)	—	—	
SK 4	V-14	—	(0.76) × —	— × —	(0.57)	—	—	
SK 7	W-13	円	1.30 × 1.22	1.22 × 1.22	0.36	—	—	
SK 8	W-13	円	1.11 × 1.01	0.80 × 0.80	1.34	—	—	
SK 9	X-12・13	円	1.40 × 1.27	1.20 × 1.23	0.19	—	—	

表5 落とし穴一覧

番号	位 置	平 面 形	規 模			長 軸 N→E	時 期	備 考
			確 認 面(m)	底 面(m)	深 さ(m)			
SK 6	U-14	溝状	3.84 × 0.52	3.64 × 0.09	0.76	54°	—	

SK1



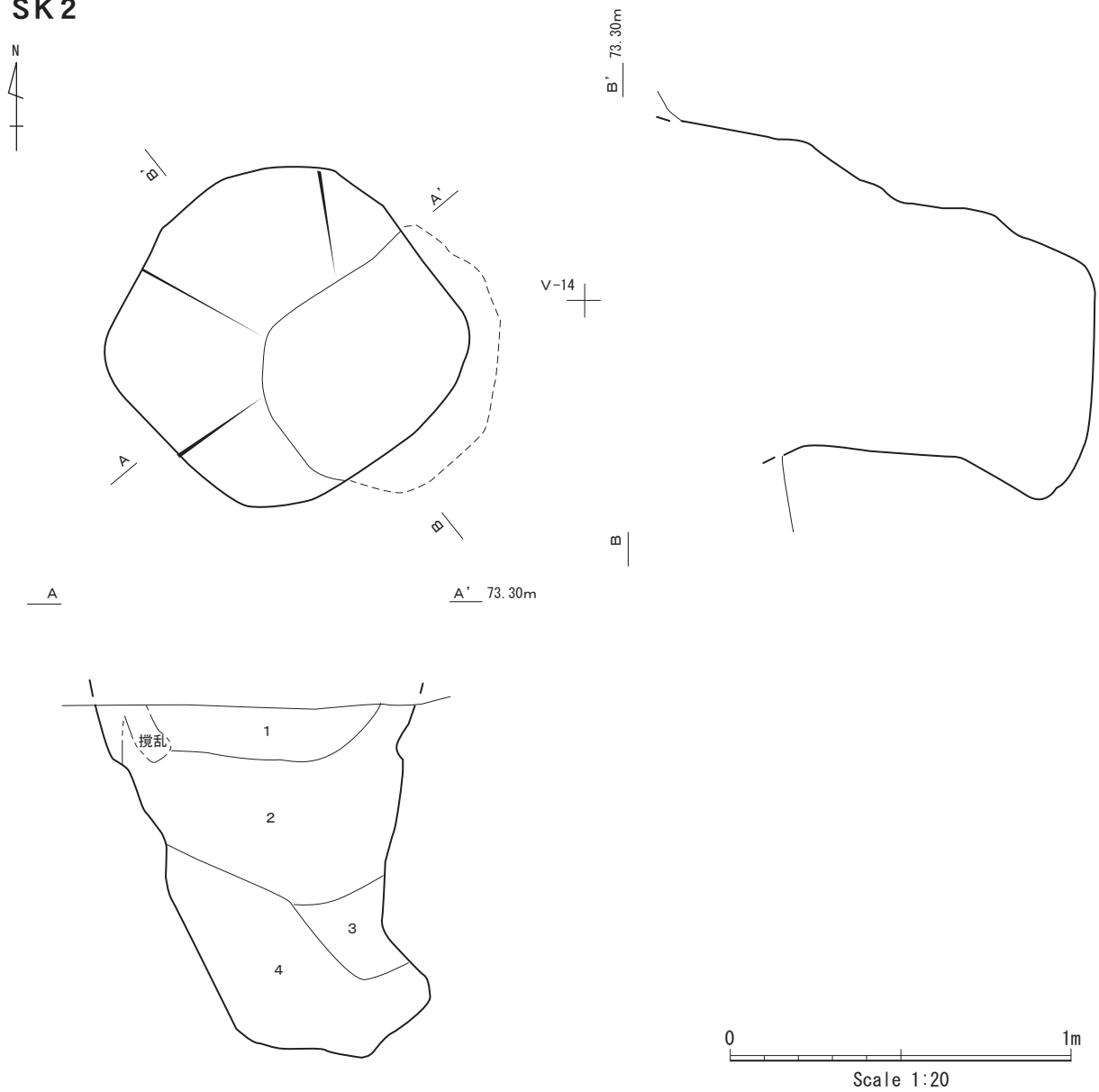
SK1

- 1 10YR1.7/1黒色
- 2 10YR3/1黒褐色
- 3 10YR2/2黒褐色
- 4 10YR3/2黒褐色
- 5 10YR4/6褐色
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色
- 7 10YR2/1黒色
- 8 10YR2/2黒褐色

- II。パミス (φ3~5mm) 微量混入。締まり、粘性あり。
- パミス (φ2~3mm) 微量混入。締まり、粘性あり。
- パミス (φ2~5mm)、ロームブロック少量混入。締まりよし。粘性あり。
- パミス (φ2~3mm) 微量混入。固く締まる。粘性弱。
- 砂質。黒褐色土少量混入。固く締まる。粘性なし。
- IV。柔らかい。粘性弱。
- パミス (φ3~5mm) 少量混入。固く締まる。粘性あり。
- ロームブロック少量混入。柔らかい。粘性あり。

図5 土坑1

SK2

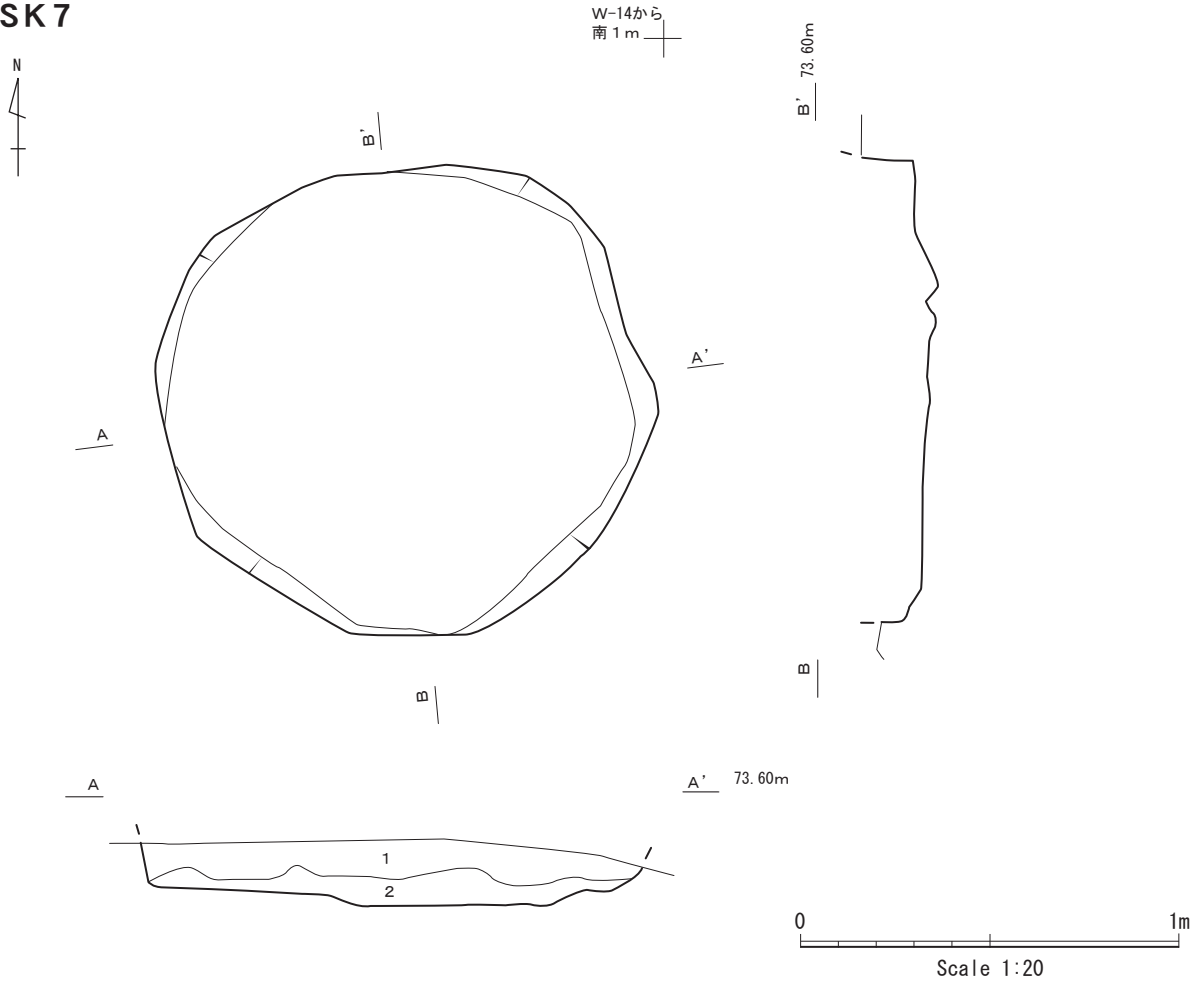


SK2

- | | | |
|---|-------------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | パミス (φ1~3mm) 微量混入。締まり、粘性あり。 |
| 2 | 10YR2/1黒色 | ロームブロック少量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 3 | 10YR3/2黒褐色 | 砂質。パミス (φ2~5mm) 少量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 4 | 10YR2/2黒褐色 | 砂質。パミス (φ2~10mm) 少量混入。固く締まる。粘性なし。 |

図6 土坑2

SK7

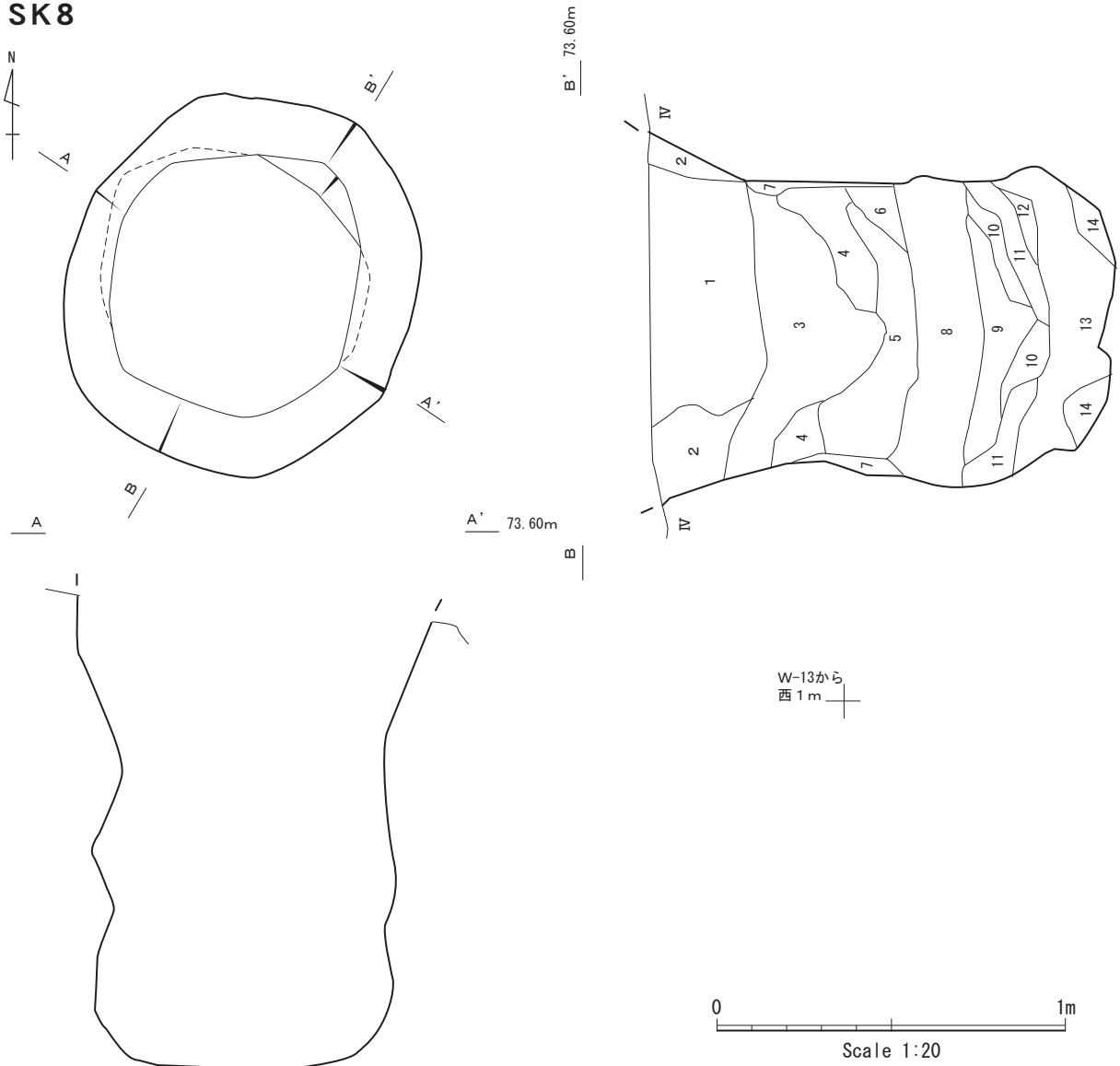


SK7

- 1 10YR1.7/1黒色 ロームブロック微量混入。締まり、粘性あり。
- 2 10YR1.7/1黒色 ロームブロック多量混入。締まり、粘性あり。

図8 土坑7

SK8



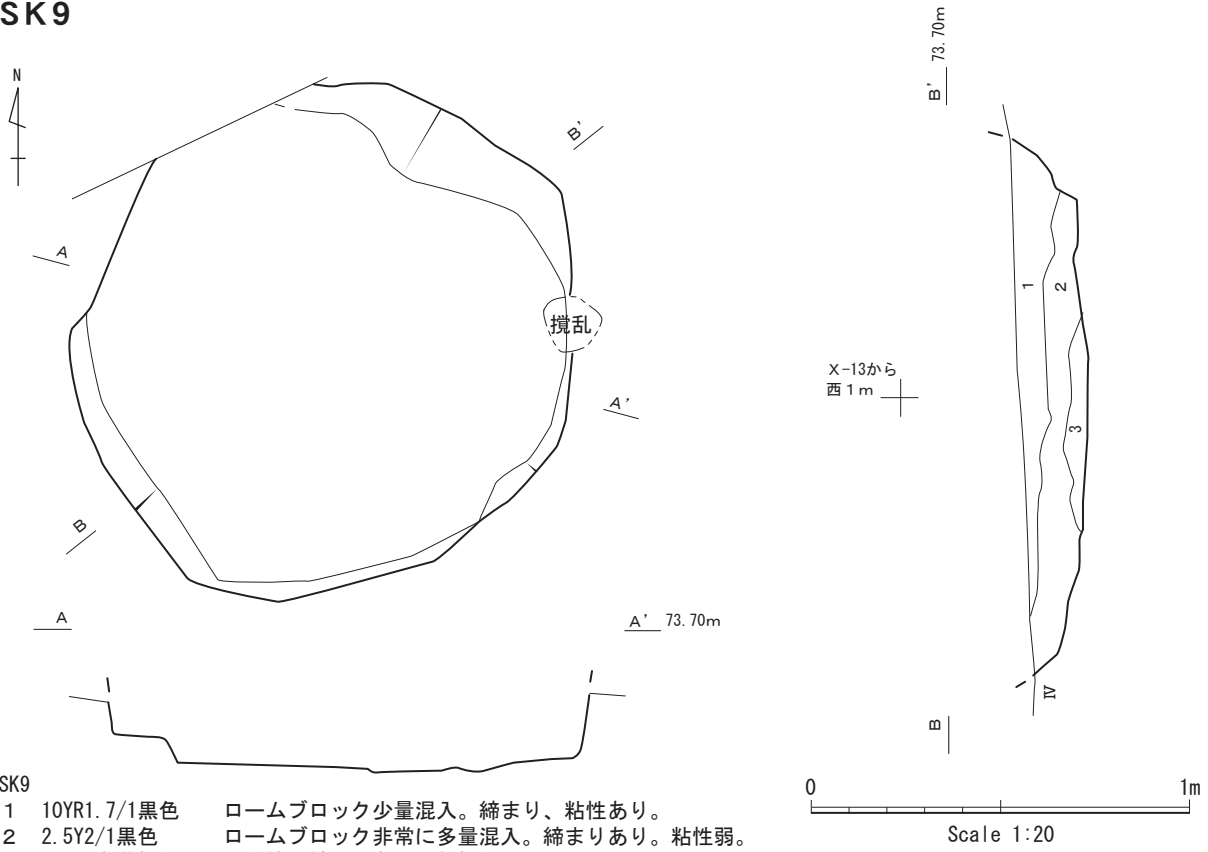
SK8

- 1 10YR1.7/1黒色
- 2 10YR2/1黒色
- 3 10YR2/1黒色
- 4 10YR2/2黒褐色
- 5 10YR2/2黒褐色
- 6 10YR4/4褐色
- 7 10YR2/2黒褐色
- 8 10YR2/2黒褐色
- 9 10YR2/1黒色
- 10 10YR2/1黒色
- 11 10YR4/6褐色
- 12 10YR3/2黒褐色
- 13 2.5YR2/1黒色
- 14 10YR4/4褐色

- II。ローム粒微量混入。締まり、粘性あり。
- ロームブロック微量混入。締まり、粘性あり。
- ロームブロック少量混入。締まり、粘性あり。
- ロームブロック多量混入。締まりよし。粘性弱。
- ロームブロック非常に多量混入。締まりよし。粘性弱。
- 砂質。IV主体。固く締まる。粘性なし。
- 締まり、粘性なし。
- II > IV。ロームブロック多量混入。固く締まる。粘性弱。
- II。ローム粒少量混入。締まりよし。粘性あり。
- 砂質。ローム粒少量混入。固く締まる。粘性なし。
- シルト。IV > II。固く締まる。粘性なし。
- 砂。ロームブロック少量混入。固く締まる。粘性なし。
- ローム粒微量混入。固く締まる。粘性あり。
- 砂。IV主体。非常に固く締まる。粘性なし。

図9 土坑8

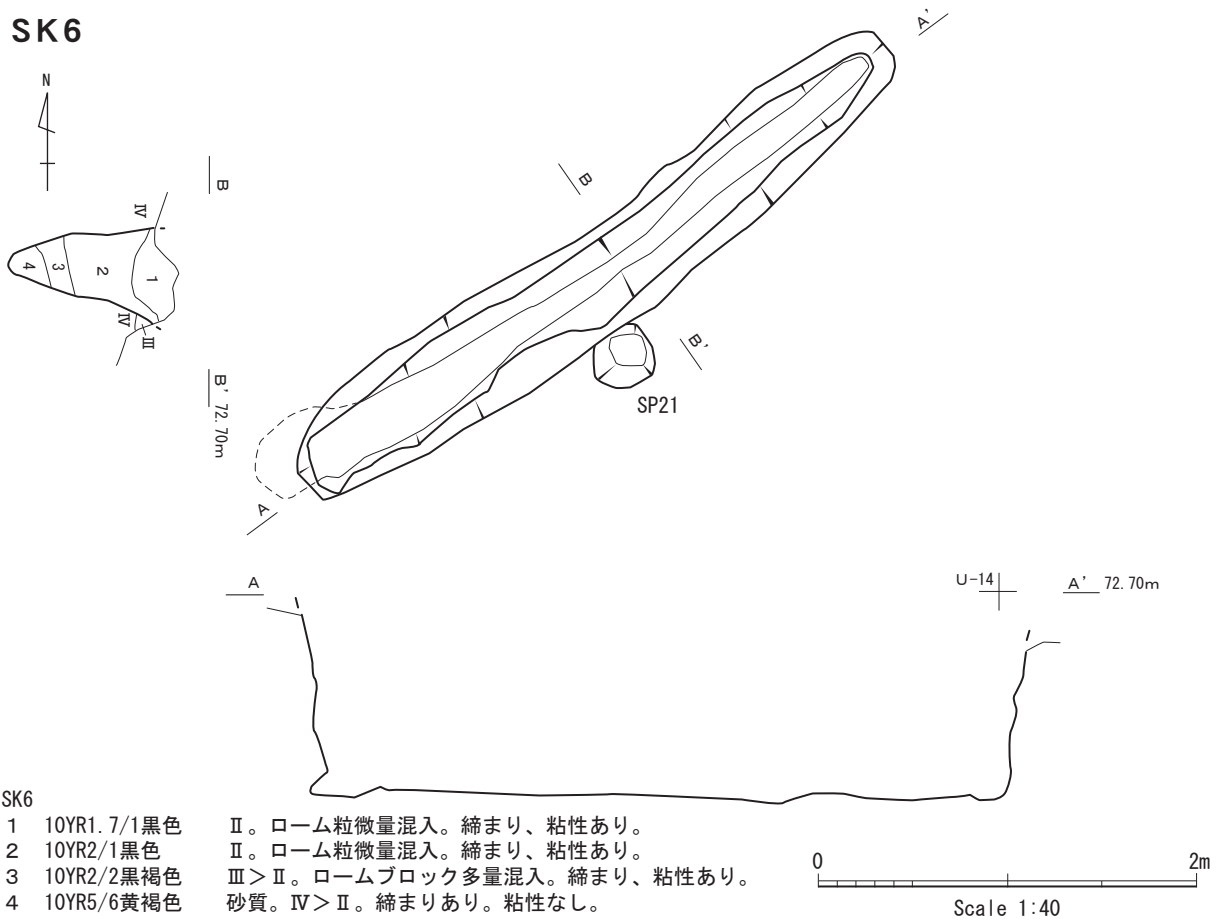
SK9



SK9

- 1 10YR1.7/1黒色 ロームブロック少量混入。締まり、粘性あり。
- 2 2.5Y2/1黒色 ロームブロック非常に多量混入。締まりあり。粘性弱。
- 3 2.5Y5/6黄褐色 IV主体。締まりあり。粘性なし。

SK6



SK6

- 1 10YR1.7/1黒色 II。ローム粒微量混入。締まり、粘性あり。
- 2 10YR2/1黒色 II。ローム粒微量混入。締まり、粘性あり。
- 3 10YR2/2黒褐色 III>II。ロームブロック多量混入。締まり、粘性あり。
- 4 10YR5/6黄褐色 砂質。IV>II。締まりあり。粘性なし。

図10 土坑9、落とし穴6

5 その他の遺構

(1) 柱穴様ピット

調査区内からは掘立柱建物や柵等にならなかった柱穴様ピットを8基検出した。径25～40cmの規模で、深さは6～30cm。掘り方はほぼ垂直で、埋土は腐植土からなるものがほとんどである。遺物は出土していない。これらの用途・時期については不明な部分が多いが、土坑や落とし穴の付近にあり、それらに関連する柱穴の可能性はある。

(2) 焼土

焼土5

位置 T-15区にあり、土坑1の北東側に位置する。

遺構 径35cm×25cmほどの範囲に分布する。焼土の厚さは9cmほどで、炭化物や灰などはない。土層断面の観察ではII層に分布することから、縄文期の所産と考えたものである。遺物はない。

表6 柱穴様ピット・焼土一覧

番号	位置	平面形	規模			埋土	備考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)		
S P 14	X-12	円	0.23 × (0.18)	0.19 × 0.15	0.13		
S P 15	V-14	円	0.30 × 0.26	0.23 × 0.23	0.06	10YR2/1	
S P 16	V-13	隅丸方形	0.26 × 0.25	0.16 × 0.18	0.08	10YR2/1	
S P 17	W-13	不整円	0.23 × 0.15	0.12 × 0.07	0.30	10YR2/2	
S P 18	W-13	円	0.34 × (0.22)	0.21 × (0.16)	0.16	10YR2/1	S P 18→S K 7
S P 19	W-13	長円	0.37 × 0.22	0.08 × 0.07	0.18	10YR2/1	
S P 20	T-15	長円	0.43 × 0.24	0.16 × 0.13	0.26	10YR1.7/1	
S P 21	U-14	円	0.33 × 0.32	0.18 × 0.17	0.11	10YR2/1	
S L 5	T-15	—	0.32 × 0.25	—	0.09		

SL5

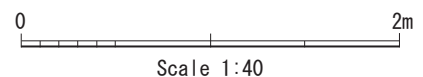
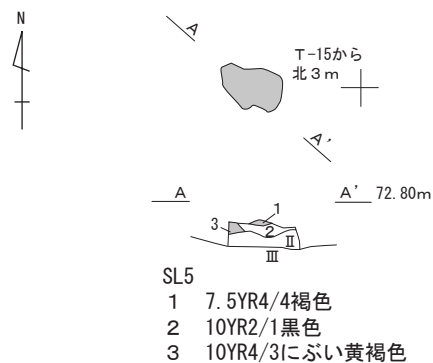


図11 焼土5

第三章 遺物

1 土器

発掘区から出土した土器片の総計は3点である。分類別の出土量は5群2点、7群1点である。

5群 後期の土器に相当する。1個体分の破片とみなされ、分布域は調査区の西端部に限られている。図版4-1・2はLRの斜行縄文が施されている。胎土に砂礫を多く含む。5群に属する可能性が高いものの、小片で、細分することができなかった。

7群 土師器甕の体部破片で、外面にヘラケズリが施される。調査区の東端部から出土した。

2 石器

1群 出土量は3点。分類別の内訳は、3類1点、4類2点である。3類はさらに石匙、スクレイパー類に細分される。図版4-4は素材となる剥片の一部に簡単な刃部を作出した削器片。4類は剥片の側縁や一端に使用によるとみられる痕跡や整形等の調整痕が認められるものである(図版4-5・6)。

2群 剥片類で出土量は1点(図版4-7)。石材は剥片石器に用いられる珪質頁岩である。

3群 石核類で出土量は1点。図版4-8は多方向からの剥離が進んだ残核。

4群 礫で出土量は2点。石材は珪質頁岩である。

表7 発掘区出土遺物一覧

調査区	P			S						合計	
	5	7	計	1		小計	2	3	4		計
				3	4						
T-15		1	1								1
V-13									1	1	1
W-12						1				1	1
W-13							1			1	1
X-12	2		2		2				1	3	5
X-13				1		1				1	1
計	2	1	3	1	2	3	1	1	2	7	10

表8 掲載土器一覧

掲載番号	分類	部位	調査区	層位
図版4-1	5	胴部	X-12	I
2	〃	〃	〃	攪乱
3	7	〃	T-15	I

表9 掲載石器一覧

掲載番号	分類	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	調査区	層位	備考
図版4-4	S1-3	削器	22.2	37.1	3.5	2.5	珪質頁岩	X-13	I	
5	S1-4	Rフレイク	36.7	43.3	8.5	10.5	〃	X-12	〃	
6	〃	〃	46.1	58.2	13.4	25.2	〃	W-12	攪乱	
7	S2	剥片	57.5	65.7	9.4	28.7	〃	X-12	I	
8	S3	石核	61.7	39.6	30.4	79.6	〃	W-13	〃	



遺跡遠景（南東から 奥は達子森）



調査風景（西から）

図版 2

完掘風景



完掘風景（北東から）

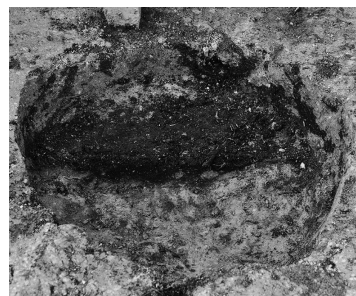


完掘風景（南西から）





柱穴列 13 (南西から)



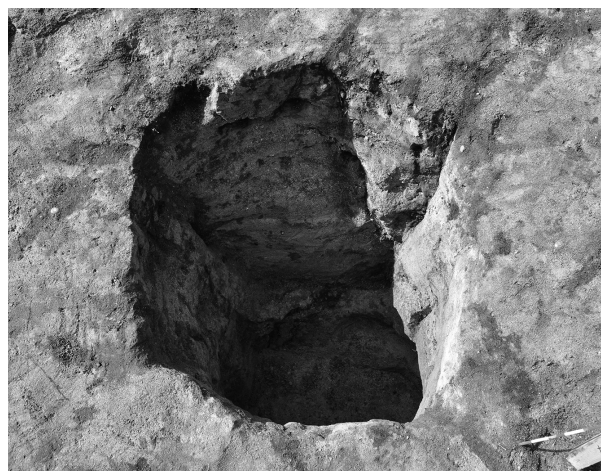
柱穴 11 (南東から)



柱穴 12 (南東から)



土坑 1 (北西から)



土坑 2 (南東から)

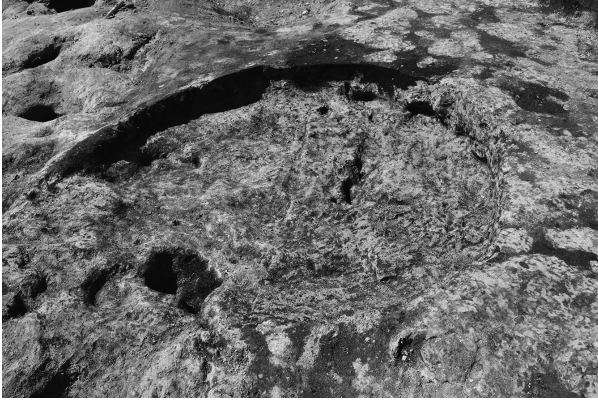


土坑 3 (南東から)



土坑 4 (南東から)

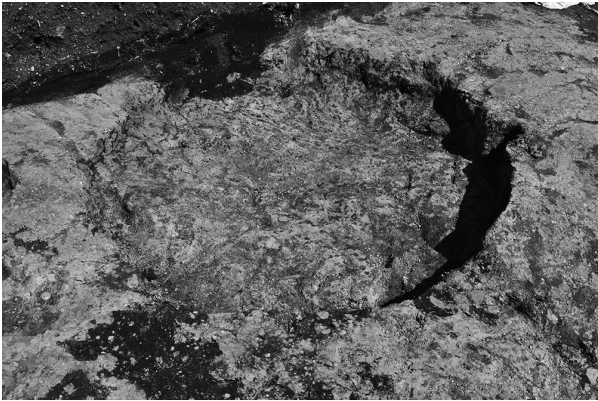
図版 4



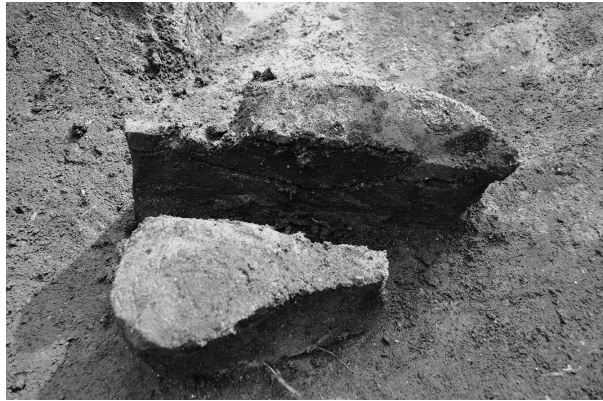
土坑7 (東から)



土坑8 (南東から)



土坑9 (南から)



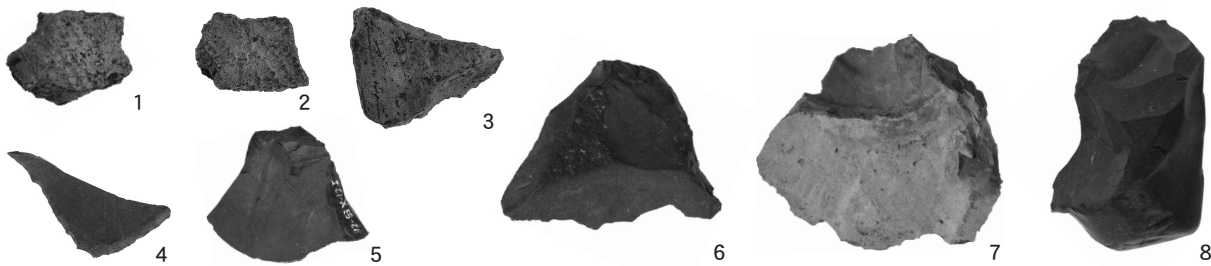
焼土5 (北東から)



落とし穴6 (北東から)



落とし穴6 断面 (南西から)



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんだてさんいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	真館Ⅲ遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大館市文化財調査報告書							
シリーズ番号	18							
編著者名	嶋影壮憲							
編集機関	秋田県大館市教育委員会歴史文化課							
所在地	〒017-0012 秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地 TEL 0186-43-7133 FAX 0186-48-2512							
発行機関	秋田県大館市教育委員会							
所在地	〒018-3595 秋田県大館市早口字上野43番地1 TEL 0186-43-7111 FAX 0186-54-6100							
発行年月日	2020年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
しんだてさんいせき 真館Ⅲ遺跡	あきたけんおおだてしひないまち 秋田県大館市比内町 にいだて 新館	05204	12-53	40° 12' 56"	140° 35' 10"	20180828 ～ 20180927	130	記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
真館Ⅲ遺跡	狩猟場	縄文	柱穴列、土坑、落とし穴、 柱穴様ピット、焼土		縄文土器、土師器、 石器			
要約	<p>真館Ⅲ遺跡は秋田県の北部、大館市の南東部に所在する。遺跡は犀川の支流の沢跡に面した台地上、標高72～73mに立地する。調査は福祉施設敷地造成工事に伴って実施した。範囲は施設建設予定部分のうち、建物の影響を受ける長さ約37m、幅約6mである。</p> <p>調査地は遺跡の南端部にあたる。調査の結果、縄文時代の遺構・遺物と平安時代の遺物が検出された。遺物はごく少ない。縄文時代の遺物は後期頃とみられる。</p> <p>縄文時代の遺構には土坑・落とし穴・焼土がある。このほか時期不明の遺構に柱穴列・柱穴様ピットがある。</p> <p>遺構・遺物の分布は希薄であり、集落の主体とはいえ、周辺に生活の場があったと推測される。</p>							

大館市文化財調査報告書第18集

真館Ⅲ遺跡発掘調査報告書

発行日 令和2年2月29日
編集 大館市教育委員会歴史文化課
大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地
発行 大館市教育委員会
大館市早口字上野43番地1
印刷 株式会社成文社 大館支店
大館市字沼館道上102
